

日本心臓病学会誌 (Journal of Cardiology – Japanese Edition) の休刊にあたって

JC創立編集長 坂本 二哉

長い間様々な問題を抱え、懸案となっていたJCの日本語版が遂にその終焉を迎えることとなった。感無量である。これは押し寄せる急激な国際化のせいでもあるが、学会主導者の多くが論文の英文化を望み、また和文誌発刊に財政的な問題が絡むとあれば、今回の裁定に従うのも已むを得まい。2、3年前、知人にBNPの良い読み物を探して貰ったら、届いたのは何と「日本心臓病学会誌」の分厚いコピーであった。それに気付かなかった自分が恥ずかしかった。それがもう見る事が出来なくなるなどと思うと、冗談だが、ついでに年会費や学会参加費もドル建てにしたらどうだろうと言う者が出て来てもおかしくはない、そう思ったりした。

我が国における国際的な循環器学誌といえば、1935年に創刊され、最も長い伝統を有する「日本循環器病学 (The Journal of Japanese Circulation Society : JCS)」がある。誌名はその後多少変更されたが、長い間、「日循誌」として親しまれて来た白い表紙の雑誌である。印刷紙は寄贈され石灰紙で、当時としてはとても美しい体裁であった。私も英文論文2、3編を含め、幾つかを掲載して頂いた。現在のCirculation Journal (Circ J) の前身である。

しかし時代の変遷からか、ほとんどまともな査読を経ないいわゆる学位論文が増え、雑誌の内容に問題が生じるようになったように思う。投稿された学位論文を迂闊に拒否すれば、論文執筆者の主任教授に傷をつけることになろうし、それ故か、2頁も無い学位論文とか、内容の空疎な論文が載った。

このようにそれまで真っ当な英文心臓病学誌が無かったことから、1961年、東大第二内科からJapanese Heart Journal (JHJ) が発刊された (主筆：上田英雄教授)。その趣旨は真っ当なもので、当時の文部省からかなりの援助も頂いた。しかし発刊に際して事前の協議が無かった事もあって日循主導者の猛烈な批判を浴び、JHJ側は京都に出向いて謝罪・釈明させられるという空恐ろしい経緯があった。いってみればその前に仁義をきれということであろう。当時の学会体質はこのようであったのである。若手の誰もがこのような体制に嫌気がさしていたように思う。

JHJには外国からも多数の投稿があり、英文誌は成功したのである (私もJC編集の傍ら、11年間にわたって一人でJHJも兼任編集した)。諸外国からの別冊請求も格段に多くなった。これは執筆者の別冊希望数が急激に増えた事から類推された。私の主要な英文論文は当然JHJに掲載さ

れ（掲載しなければならなかった）、和文はJCに投稿される事になった。

そのような経験があったから、私はJCの英文化に対して必ずしも否定的ではなかったのだが、英文になれば読者は通読に日本語の何倍かの努力を要求され、多くの方々は傍迷惑に感じる事であろう。国内の読者に気兼ねするか海外の読者を優先するか、それによって誌名を売り出すか、論文作成者の名声や地位を高めたいか、どれが当時のJCの立場であったか、そういう点を考慮すると、正直なところ、私が英文化に全く拘りが無かったと言えば嘘になる。以前、フランスのマルロー文化相は、教授選考などに際して、母国語の論文以外を業績評価の対象から外した。流石、イギリスやアメリカ嫌いの国である。私もアメリカ嫌いだったが、しかしそういう意味で日本語に拘った訳ではない。エイズの論文が母国語でフランスで発表され、その後アメリカでプライオリティ論争が起こり、発見者がアメリカに移住して、どちらでも良いような結果になった。そんなおかしな話ではないが、JCに関しては、私はどちらを向くべきか、強いて言えば英語論文と日本語論文の住み分けに拘ったとのだといっても良いだろう。

びっくりした事だが、「日本人は日本語で雑誌に投稿して査定されてしまったら、英語に直して外国誌に投稿するんだね」と、日本語で書かれた論文の方が英語でのそれより価値が高いかのよう言っていた外国人学者に出会った事がある。

因みに日本放射線学会でも、色々な経緯はあったのであろうが、結局、英文誌、和文誌、共に残す事になったという。

JCの前身、Cardiovascular Sound Bulletin (CVSB：臨床心音図)は、1970年10月の第一回研究会発表論文を掲載すべく、翌年早くに出版された第1巻第1号をもって嚆矢とする。当時40歳前後の若造達がそれまでの体制に逆らうかの如く、全国的な呼びかけを行ったのであるから、この研究会の発足は当時から既存関係学会から問題視された。命令を受けたらしい私の上司によって参加者全員の氏名がチェックされ、殊に後々日循からはひどい干渉を受けることになった。しかしそんな事は一向にお構いなく、すべてを無視しての独断先行する私達であった。

創刊号の内容は勿論日本語論文であるが、読まれる事を期待してではなく、この和文誌はそれまで交流のあった150余名の欧米人にも挨拶代わりに送られた。雑誌の表紙にはCardiovascular Sound Bulletinという印刷があり、心音図そのものが表紙であるから何の雑誌かは一目して分かるであろうが、内容を分かって欲しいのではなく、「世界に先駆けて日本にこういう雑誌が出来ましたよ」(君達には出来るか?)という通達である。実際、心音図専門誌など、何処の世界にも存在しなかった。誌名に"Japanese"と冠しなかったのは、こういう雑誌は世界に一つである事を誇示したいという高揚した気分があったからでもある。最近の幾つかの雑誌では誌名からJapaneseという字が消え、国際的(international)になったような感じを与えようとする努力(?)の跡が見られるが、私達にはそういう追随する気持ちは初めから無かったし、今後も無い

であろう。

しかし、兎に角まず第一に、格調高い日本語論文であらねばならない。そして第二に、最新の知見をもっとも提供したいのは日本の研究者、そして読者諸君である。そしてそれには、形式化されがちな無味乾燥の論文ではなくて、まず美しい、また正しい日本語で、魅力的な論文を書くという事である。私にそのような難事業をこなす才能の無いことは分かっていたが、著者には失礼であったかもしれないけれども、そこまでやるのかという徹底した校訂を繰り返し、読みやすく、また文法的にも正しい日本語論文の作成に努めたのであった。

雑誌の反響は直ちに現れた。三重大学の高崎浩教授を始め、理解ある教授先生方から強い支持と激励を頂いた。そして日本語雑誌であるにも拘わらず、高名なHarrison教授の研究室やイギリスの名高いLeatham博士、シカゴのLuisada教授など、いくつかの施設から英文の出版を求められたものである（翻訳版が欲しいというのである）。

確かに第1巻第1号は完全な日本語であったが、反省点もあった。第2号ではまず英文題名を脚注に記載、第2巻から執筆者の英語住所、次いで図の英語説明を載せた。鈍足だが、一歩また一歩の歩みであった。論文内容は心音図学が主体であったので、その道の外国専門家は原図を見るだけでほぼ了解出来たらしいが、フランスでは雑誌を持って大使館に赴き、内容を尋ねるといふ人々が現れた。Baragan教授などの心音図の大家がそうであり、流石はLaennecの国である。そしてかねてから日本を見下しているイギリスからは英文抄録の掲載を求められた。心音図の美麗さにも驚いたようである。本誌はIndex Medicusにも早くから記載されていた。オリジナルな内容は大体分かるから、日本の学者が何を考えているか、考按部分を知りたいからそれを英文にせよという要請も来た。このように、1970年代初頭、雑誌英文化の機運はもう既に始まっていたのであった。

第3巻(1973年)からはタイトル、著者名、Key wordsを含む詳細な英文抄録が掲載され始め、編集は大変であったが、早くも外国誌に引用され始めた。徐々に体裁を整えて来た雑誌となったが、しかし日本の雑誌はJCを毛嫌いしたのか、引用される事は皆無であった。日本人が自国の論文を引用したがるのは、かつての学位論文の殆んどがよい加減のものであったせいでもあるであろう。実際、これまでの無数の学位論文のうち、日本の誇りとして後世に残されたものは極めて僅かである。失礼な話だが、殆どが出版と同時に消えていったのであった。ましてや教科書に引用される例などは珍しかった。

循環器の長老も、例外もあったが、多くは彼等のいう「造反組」である私達のような若手を故なく毛嫌いしていた。学会における上下関係はかつての徒弟制度さながら、厳しいものであった。長老達はそこに彼等の牙城を築き、安住の地としていたのである。そこへ持ってきて、私達とは無縁であったのだが、時期を同じくしてインターン問題に端を発する全国的な大学紛争があり、

若手を中心とする私達の研究会は、日本医学会総会に並行して開催されていた「反日本医学会総会」同様、異端分子の集まりと看做されたようであった。

そういう事もあってか、悲しい事に、優れた論文であっても、JC論文をいわゆる学位論文としては認めないという大学があった。しかし同じ論文をまた別の雑誌に掲載すると二重投稿という事になり、それがまた問題となった。何とかしてJCを無視しようとする陰湿な一団が確実にあったのである。

1976年からはJournal of Cardiography (JC), 1987年からはJournal of Cardiology (同じくJC) となって臨床心臓病学全般を扱う学会誌へと変身した。だがそうなる事は早くからの魂胆であった。実は「心音図」研究会は当時の心音図流行を借りての隠れ蓑であったのである。この心臓病学会への移行は故町井潔先生の英断であった。自分で人生を切り開く生き方としてのサルトル流実存主義の歩みのようなものである。Index Medicusからは改めて掲載通知が来た。とっくの昔から載っていますと返事した。

そして1980年にはBraunwaldのHeart DiseaseにCVSBが引用され、これが教科書への引用の嚆矢となった。FeigenbaumのEchocardiography第3版(1981年)では全引用文献の実に10%強をCVSB, J of Cardiographyが占めるまでになった。Circulationにはやや太刀打ちし難かったが、JACCなどはJCに及びもつかなかった。このような破天荒の事態は誰に話しても信用してくれなかった事を今更のように思い出す。だが関係者は小躍りし、随喜の涙を流した。心エコー図学のバイブルとも言われたFeigenbaumのこの版では、それに対して日本発の英文誌引用は少数のJHJ論文を除けばほとんどなかった。

それに先立ち、1977年、アメリカ各地を視察した際、所々の図書室や図書館にCVSBが置かれていて、中に色々書き込みがあったり、意味は不明だが、色分けがされてあったりしたのを見て、正直、嬉しかった。MGHの図書室では、メインの雑誌として、閲覧室にJCが置かれていた。100種ばかりの雑誌中、日本の雑誌はほかに英文の癌研究誌があるのみであった。和文誌なのに、JCはかなり意識されていたのである。JHJも日循誌もなかった。

論文の重みにはimpact factorも重要だが、専門的な成書に引用されてこそ、論文の真価がある。JCはFeigenbaumのほか、ConstantやTavel, Luisadaなどのテキストにもかなり引用され、確かにそういう事が世界の注目を集める一因ともなったと思う。英文タイトル、サマリー、図説英文、それに引用文献(英語が多い)の著者名(孫引きではよくスペルのミスがあるが、nativeの人にはミスがすぐ分る)まで、広島ABCCのRussell先生というアメリカ医師の半ばボランティアに似た献身的援助を受けた。並行して吉川純一君も徹底した英文添削をして下さった。そのような陰の力が和文誌を国際的にした一因でもあった。しばしば来日したConstant先生はstingyなJewish人間であったから、私はその都度ホテルに呼び出され、鞆に詰まったJC論文をもとに散々

進講させられて迷惑した。でもその知見を色々な所で披露してくれるのだから、ボランティア活動でも仕方がなかったともいえる。今では懐かしい思い出である。

余談であるが、確か1983年末、台湾でのAPCCの際、JCSのある大家が私に尋ねた。「どこの国に行ってもJCを知っている人は多いのですが、日循誌を知っている人は稀です。どうしてでしょうね?」。「それは勿論内容による」と言いかけて私はわざと知らない振りをして答えた。「日循誌は確か英文誌でしたよね」。「勿論です」と大家。「それで分かりました。私の所のJCは和文誌なので…」。「大家はぷいと立ち去った。外国人が論文の事で日本に教を請いに来る、そんな事って他にあるかな、そういう自負が私にはあった。(その後、耳にした事だが、数学や工学関係では、そういうがよくあるのだそうである。殊に数学は日本が世界一だそうであるが、ここでは日本語も外国語も同じ言葉である)。外国では、また「日本の論文や発表については、長老に質問して無駄、若手に聞くのが良い」という内外での風潮が出始めた。上田教授も若手を連れて講演に行くようになられた。私達は所属や年齢に拘わらず、無名でもその能力を見込んで、30歳にも満たない若手を積極的に検舞台に乗せるといふ、長老を逆手で撫でるような事を敢えて行っていた。そのような若手は意気に感じて勉強・奮戦した。勿論、積極的に論文を投稿して下さるようにもなった。自分達でこの会合を維持していこうという意気込みと熱気が感じられた。

しかしやがて激増する投稿論文に悩まされるようになる。私は30数冊のSupplementの論文を含め、編集長交代までの24年間に総計約2,600編の論文に手を染め、赤を入れて来たが、発足当時は発表論文の雑誌掲載を強要し、拒否する場合は次回からの応募演題を受理しないという暴挙を敢えて行った。これには、投稿出来ぬ発表は結局の所、論文化に値しないものだという考えがあった。また実際、発表時に散々叩かれたものは投稿されないのが一般であった。しかし受理する以上は、論文を精魂こめて非の無いものに仕上げたつもりである。それ故、必然的に非常に優れた発表および論文のみの掲載となり、雑誌の質が向上し、また演題が採択される事自体が非常に名誉となって、益々選び抜かれた論文が出来上がる事になるのであった。通常の学会ではあり得ないが、暫くの間は発表演題の90%以上が論文化されるという、考えられぬ事態であった。

学会演題数の多い事は必ずしも会の内容充実や隆盛には繋がらない。逆に身を破滅させる事になりかねない。その事はそれまでの演題採択法に厳しい制限を加え、演題を3分の1程度の数に厳選して成功した第52回日本超音波医学会集会(1988)に如実に示されている。演題数の大幅な制限によって良質の発表のみとなり、懸念された参加者の大幅減少とは逆に、従来の2倍もの参加者を得たのであった。皆、良い演題を聞きたいのである。日本心臓病学会でも同じ事を行った。これがJC成功の要因であった。参加者は演題を聞きもらすまいと会場に釘付けとなっていた。

これは実に発表者と開催者、そして編集陣の意気と熱のなせる技であった。副編集長の吉川純一君と今は亡き藤井諄一君が私を支える東西の“ジュンイチ”であったし、前述した日循その他の激しい締め付けに対する干渉役を務められた故上田英雄先生、故古田昭一先生の援助も忘れる

ことは出来ない。JCCの成功は、造反というよりも、まさしく励まし合い助け合う若者達が齎した勝利であったのである。

このように表面上は強気で押し通した私達だが、長老達に呼び出されて、研究会、さらに学会の解散を強要されたことは二度、三度に及ばない。それまでの日本の学会では考えも及ばない1題15分という発表時間(最初は討論自由、それを編集者が現場の雰囲気が彷彿とするように作文して、すべてを雑誌に掲載した)、それまでの学会とは打って変わっての若手の積極的登用、座長の積極的討論参加なども上述の如くである。それに春の学会は日循総会の前日、前々日に行われ、これには多くの若手が参加し、翌日からの日循では若手が地元に戻ってしまうという恐れが現実のものとなった。実際、そういう主客転倒の事実(私はそうは思わないが)もあって長老の激怒を買い、考えられない仕打ちを受けて、遂にJCCは日循に隷属させられるという破目に陥ったのであった。つまり日循の中の7つの委員会の1つに格下げという訳である。そうでないと開会を許さないという。本来、学会などの会合は自由な筈なのである。

数名の長老の命令により、この会はかくして発足5年目(1975年)に日循の研究委員会として再発足し、これが長老方の疑心を和らげる事となった。毎年の行事報告は義務であった。日循に先立つ会合の開催が認められたという訳である。

その後ようやく学会として日循の足枷を離脱出来たのは、実に7年後、1982年に至ってであった。それまでは毎年研究会報告をさせられ、10万円を給付され、それによって会の運営の自由が制限されていたのである。此処までの事を知る会員は現在の永年会員位のものであろう。その代わりと言っては、残念だが春に開催される日循とは離れ、年1回、秋の開催のみとなったのである。

半ば反骨精神も加わって、再三の廃刊の通告を無視して発行し続けた雑誌も独立した。今後は誰はばかる事のない編集が出来、会の運営方針も自由である。かくしてJCCは毎年様々な計画を設け、モーニング、ランチオン、イブニングセッション(いろいろ名前が変わった)などを順次開催、市民公開講座、外国学会(ACC)との発表討論会、各種の勉強会や講集会などのアイデアを出し続け、後になっての雑誌大型化などを率先して実行し、実に多くの事がJCCから各学会に普及して行った。それは良い事だが、翌年から直ぐにJCCの行事を真似る学会も現れた。雑誌の大型化はJCが採用後、直ちに日循がそれに倣った。日循とJCCは色々な所で競い合っていたのである。だが本来それは「研究」と「臨床」の住み分けである筈であった。従来の日循は患者や動物を対象とした実験的研究至上主義の世界であり、それに反発する若手が臨床中心の会を持つ事を希求したのである。そしてそれは本来切磋琢磨では無く、相互補完であるべきであった。しかしやや学会のエゴと思われても仕方がない独善的な「専門医制度」に惑わされ、両学会の境目がおかしくなっている。でも私は理事長就任直後、その職と雑誌編集に専念するため、日循を退会し、その事が会の動きを円滑にした。勿論、専門医的な称号も返上した。

だが良い事ばかりではなかった。色々な苛めに対して、現実には上田先生の精神的援助がなければ自立しかねなかったのであった。学会は誰にも公認されなくても、100数十名から、予期せぬことに直ぐ2000名以上に膨れ上がった。学会会場は常に超満員で、展示会などは無かったから、廊下を歩き廻る参加者はほとんど見かけられないほどの熱狂であった。とことんまでの討論に、参加者はとても充実感を感じたであろう。ファンがファンを呼んだ。学会場の近辺をうろろろする参加者をほとんど見られなかったのも理解出来る。経済的には上田先生（しばしば無心に伺った）、フクダ電子、アロカ、東芝から若干の援助を得、また人的奉仕も受けた。特にフクダ電子の石田義則さんには、非常に長い間に渡って様々な援助を頂いた。第一回の会場であった東大臨床講堂を二人でトイレまで含めて1日ばかりで掃除をした事から始まって、日本中、何処へ行くのも常に二人一緒であった。初めの頃は彼が印刷所と大学とを往復した。

しかしJCとJHJとの掛け持ち編集長、それに投稿論文の増大は、一時、JC発刊の遅滞を齎し、みんなに迷惑をおかけした。本当に責任を感じる。年6冊のJHJ各号（正確に200頁）は毎号予定日までに文部省に届けられねばならず、一日の猶予も許されないばかりか、予算編成や慣れない役所宛の書類制作に手間取り、その分がJC発行に皺寄せされていたのである。JHJの激務を背負わせる事でJCを断念させようとした上司の態度は知っていた。しかしやるとすればよい加減には出来ず、何でも隅から隅まで目を通さねばならぬという私の性格も災いした。そのため遂に研究室の仕事を諦め、別の部屋に閉じ籠って、出版に専念する日々を過ごす事になったのであった。

そのようなJCが学問的に果たして来た役割は無視できぬものと信じる。最近歴史が短い割にはかなり高いimpact factorを示すようになったと聞き及んでいるが、それは2008年以降の英文誌のお蔭でもある。だが上質な英文を書く事は大変である。逆に言うと、最近日本に帰化され、もっとも日本に通じた日本的アメリカ人であるDonald Keene先生でさえ、その日本語はnativeなものではない。最近、タレントでもあるダニエル・カールさんの講演を聴く機会があったが、その山形弁を交えた流暢な日本語には感心した。その基盤には日本文化の研究がある。弁護士のケント・ギルバートさんやテレビプロデューサーであるデーブ・スペクターさんの日本語は素晴らしいが、やはり日本的なものへの真摯な勉強が基礎になっている。しかし一方では、母国語を忘れないため彼等の国語である英会話の練習もしているというほど、自国語の劣化に神経をとがらしてもいるのである。因みにギルバートさんとスペクターさんの日常の会話は、自国語の英語ではなくて、日本語である。そこまでしなくてはならないのなら、今の日本人には完璧な英語など望むべくもない。

このような外国人は例外中の例外である。近頃の、殊に若手研究者の英語は確実に上達したが、日本人がいかに巧みに英語を操ろうとも、それは決してnativeなそれではあり得ないし、外国語を書けるからといっても外国人になれる訳でもない。英国人（これも色々あるが彼等は十分理解し合える）に聞くと、彼等は我々を、妙な英語を話すが、まあ意味は大体分かるという程度にし

か見ていない。彼等は日本人に対し、はなからきちんとした英語を要求していないのである。執拗に日本語に拘り続けた私の心には、底辺にそのような諦めの心もあった。

雑誌と直接的な関係は無いが、心エコー図法の前途を見据えて、私は一大事件を起こした。連日の評議員会では大半が反対であったにも拘らず、それを無視し、理事長の職権を利用して、心エコー図研究会（直に学会とする）を取ってJCCから分離独立させたのである。そして権威者となった吉川純一君を理事長とし、世界に先駆けての心エコー図学会（当初は研究会）を主催した。これは確かに無謀との誹りを免れないが、結果的には成功であった。「百万人といえども我行かん」というかつての上田先生の激励あればこそである。

和文誌編集を巡る思い出は多い。研究社印刷の永野新勇さんはJCとJHJ両方の印刷担当であったせいもあって、長年にわたり、連日夕方にやって来ては原稿や校正の受取り、図の製版業務などをやっておられた。通常は各1号分をすべて纏めてから印刷所に入れるのだが、JHJはともかく、JCは常に1本ないし2本ずつで、その掲載順序は決まっていなかったので、印刷現場からは嫌われていた。ノンブル（頁の印刷）が合わなくなってしまうからである。そのため、お気付きの方もおいでであろうが、JCでは論文をすべて奇数頁起こしとしたのである。それなら後から来た論文をどこに差し込んでもよく、1冊分が完成してから改めてノンブルを入れればよい。かくして印刷工程が若干短縮された。

和文誌には毎号、編集後記が載っている。実は雑誌編集で最も楽しい事は、この後記の執筆であった。読者も期待していたようである。永野さんは日本でいの一にこの後記を読む事が出来るのはこの私だと喜んでいて、しばしば私の横に侍って、編集後記の書き終わるのを待っていた。この編集後記は、先年、第60回学術集会に際し、鄭忠和理事長、井上博会長（出版委員長でもある）の御好意で、「JC語録 Journal of Cardiology 編集後記集」として出版され、会員に配布された。約18万字と、長大な書き物となった。

1996年頃、かなり長期にわたり、和文誌には積極的に書評が掲載された。雑誌編集担当が研究社から離れ、編集部門が独立してインターメディカル社に移り、その齊藤秀朗さんが雑誌の体裁を改めて、従来のB5半からA4変型判に大型化してからのことである。忌端のない率直な書評で、その分、辛口書評として江湖に迎えられた。実際かなりの酷評もあり、それに対する直接的・間接的怨嗟の声を聞いた。膨大な数をこなしたが、半強制的な執筆制限もあり、出版社が送本しなくなってしまったので洋書中心の書評となったが、時間的制約もあって、その後は寥々たる数となった。今回の掲載はその最終回である。

長年にわたる編集長の最大のメリットは、国際的にある荣誉が与えられるという事である。JACC編集長のRoberts博士がそう言うておられた。従って随分と各国へ出向き、編集長として

接待される機会が増えた。この事は編集後記にも垣間見られる。校正刷りなど持参しての外国旅行ではあったが、毎回、家内ともどもの大旅行で、最も気持の休まる楽しい日々を過ごし得た。有り難い事であった。

私は中央からは遠い秋田市に国際教養大学を開設し、成功に導いた故中嶋嶺雄学長が大好きである（勿論向こうは私如きを御存じなかったが）。それ故、彼の早世はショックであった。彼は大学の理事長をも兼ね、すべての事を誰に相談する事無く一人で決断・実行して成功した事が羨ましかった。JCCの生まれ方も、規模はとても小さいが、それによく似ている。またこの大学の講義はすべて英語である。だが彼が主張した「真のグローバル化」とは、英語を読み書き話すこと自体ではなく、国際的教養にあった。

英語を読み書き出来るだけでは世界に通用しない。歴史や文化を背景に日本人を育てるために英語が必要だと、彼は感じていたのである。JCもそういう時代に入りたい。

洗練された日本語に通じ、その歴史や文化と同等に、日本の科学、医学を世界に伝えて行きたい。現在のJCC理事長・理事の方々はきっとそういう結論に達したのであろう。ならば潔く和文誌に暫しの間別れを告げる事にしよう。

和文、英文を問わず、長期にわたってJCをはぐくみ育てて来てくれた吉川純一、鄭 忠和、平山篤志の歴代編集長、JC Cases伊藤 浩編集長、それに多くの関係者諸兄姉に、改めて深甚なる謝意を表したい。

JC語録でも述べたが、Shakespeareの言葉に“*What is past is prologue*”とある。Washingtonの米国公文書館裏門で見られる。「過ぎ去ったものはこれからの序詞（はじまり）」である。和文誌「日本心臓病学会誌」の終焉も、同じように新たなるものの出発であって欲しい。いや是非、そうであって欲しい。それを祈念し、莞爾としてこの最終稿を終える。